（様式第８号）

事業報告書（令和４年度）

事業名　ESD Café URA ２０２２

団体名　NPO 法人 こくさいこどもフォーラム岡山
担当者名　難波　徳行
※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

１．活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）
県下中・高生を対象に下記の 2 事業を実施した。 １ ･国際塾 2022(第 19 期) ・全 11 回の講義と 1 泊 2 日の合宿研修（岡山県青少年育成センター閑谷校）を行った。 ★カリキュラムは、添付資料を参照願います。 ・入塾時に 5 チームを編成。 「私たちは岡山の人口減にどう対応するのか？」をテーマに、チーム毎に通年で議論。その結果を最終回に英語で発表した。 ・期間　6/ 12　～　10/ 30 ・場所　岡山国際交流センター他 市内 4 ケ所 岡山県青少年育成センター閑谷校（7 月 30 日）・曹源寺(7 月 31 日)（1 泊研修） ２ ･ESD café URA 2022 ・日時：令和 4 年 12 月 18 日　13：00　～　18：00 ・場所：岡山国際交流センター8F(イベントホール)及びＢ１Ｆ（レセプションホール） ・参加者：中高生　118 人（23 校）アドバイザー・引率教員・世話人 47 人合計 165 人 ★参加者多数のため会場を増設、2 会場となった。 ・内容：参加者は、予め希望した SDGｓの目標別に 16 グループに分かれて、現状や課題、対策等を議論。結果をグループ毎に発表した。各グループには、アドバイザーとして、その分野に精通する社会人(企業の担当者、活動家など)を配置した。

２．ESD の視点
①事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか
当団体の目的は、グローバル人材の育成である。次の社会（世界）は中高生が担う。 今やどのような仕事に就こうと、どこで住もうと ESD や ESDｓの発想なくしてはリーダーシップは発揮できない。参加者たちは、SDGｓの目標の主旨と目標達成のための課題や課題克服のための実践方法について学んだ。（気づき　→　志を得た） 今後は、進学にあたっての学部選択や職業選択にも、確信をもって対処してくれると信じている。

（様式第８号）

②どのように学び合いを取り入れたか

気づきや視点の違いを重視した。

・先輩卒塾生からのエール　国際塾第１回において、卒塾生３名がZOOMにより出演。各々卒塾後の進路や近況などにつき報告あり。その中で、国際塾での学びが、どのように今につながっているかや今後の抱負などを語ってくれた。

・他校生との交流　グループ分けによる通年討議や合宿研修を通じて他校生との交流が、一段と深まり、その中から塾生たちは多くの気づきを得た。

・議論重視　ESD Café はもとより、国際塾においてもグループ内での通年討議を導入した。合宿では、議論のための時間を確保した。

・視点の違いを重視　他校生との交流や議論を通じて、またESD Caféに於けるアドバイザーの助言から、塾生たちは視点の違いの大切さを学んだ。

③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

実践の大切さを重視

・Esd Café・・企業等の実践担当者やその分野の専門家をアドバイザーとして、各グループに１名づつ配置した。アドバイザーからは、取り組み上の課題や工夫等ついて、適宜、助言があり、参加者はEDGｓの目標をより身近な問題として学ぶことができた。

・　国際塾・・カリキュラム編成にあたっては、SDGｓの実践あるいはそれにつながるテーマを重視した。（例　第３回、４回、６回、８回、10回、11回）

３．取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

当フォーラムの活動目標は、「グローバル人材の育成」である。次の時代を担う若者たち（中・高生）には、将来、何をするにしても、どこで暮らそうとも日本人としてのアイデンティティを保持しつつ、広い視野に立って周囲をリードできる人材に育ってほしいと願っている。その際、求められるのはSDGｓの発想と手法である。今や、これなくしてはリーダーシップは発揮できない。

・国際塾では、毎回、受講者のレポート提出を義務付けており、これに塾長がコメントを付して返還している。いわば受講生と塾長の対話が繰り返される。また、通年論議の各チームには、当フォーラムの世話人がメンターとして参加、毎回の議論の中で個々の塾生の成長ぶりも確認できる。さらに最終回では、受講生が一人づつ年間を振りかえって感想を述べることを恒例としているが、どの塾生も入塾時に比して目を見張るほどに成長している。

・塾生やESD Caféの参加者募集のために各校を訪問の際に、担当教員から、前年度参加者の成長ぶりを聞かせてもらうことも多い。

（様式第８号）

・2022 年度は、国際塾入塾生　52 名、ESD Café 応募　132 名（出席 118）と過去最高の実績であった。これは、学校現場に於いてもこれら事業につき高評価をいただいている証左ではないかと考えている。（先生方の応募推奨があってこその結果であろう）

４．今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

・展望

将来的に塾生や Café の参加者がすべて岡山地域に定住するとは限らないが、彼らはどこに住もうと何を職業にしようとも、ここで学んだ SDGｓの発想と手法をもって当該地域の発展に貢献してくれることを確信している。

国際塾は第 19 期を終えて、今や卒塾生も 500 人を数えるまでになった。卒塾生は、いずれもが立派な社会人として各方面で活躍している。

例：村おこしのスペシャリストや脳科学の研究者、国際弁護士、英語教師等

・課題

参加者（校）の多様性を広げたい。ここ数年、参加者が普通科系の生徒に特化している。かってのように商業系、農業系、工業系にも広く参加を呼び掛けたい。